様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月　２日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８　～　２０１０
課題番号：２０５２０５８３
研究課題名（和文）　近世近代における農民的開墾に関する実証的研究

研究課題名（英文）　Research on the reclamations by farmers in the Early modern times and Modern times

研究代表者
中山　富廣（NAKAYAMA　TOMIHIRO）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：５０１９８２８０

研究成果の概要（和文）：
本研究の成果は、江戸時代における中国地方の開墾面積を数量的に明らかにできたことである。沿岸・島嶼部と内陸部では相当に開きがあるが、それでも内陸部においても耕作可能な土地はほとんど田畑として開発され、検地帳登録の畑の大半が水田に地目変更されていたことが明らかになった。また瀬戸内海の島々では山林面積より田畑面積が広い村が多数を占め、段々畑の景観がすでに成立していたことがわかる。

研究成果の概要（英文）：
The result of the present study is to be able to clarify the reclamation area of the Chugoku region in Edo period quantitatively. There was considerably a difference in the coast, the islands part, and the inland. Still, the workable soil was almost developed as a field in the inland. Most of former field were clarified and it was clarified that the land classification had been changed to the rice field in the Chugoku region. Moreover, the area of the field is wider than the area of the forest, and it is understood to have already approved the spectacle in terraced fields in islands of the Inland Sea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：日本近世史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：開墾・検地・禿山・村落共同体・地租改正

１．研究開始当初の背景

以前、芸予諸島の分析を行い、明治から大正期にかけて島々の耕地面積は拡大しておらず、可耕地の大半がすでに幕末期までに開墾されていたことを指摘した。また中山『近世の経済発展と地方社会』(清文堂、2005)のなかで広島藩・福山藩の耕地面積について統計的分析を行い、近世における耕地面積の増減について明らかにした。

これをうけて本研究は、対象地域を中国地方に広げて検証してみようと考えた。ただしこの動機の背景には、従来の農村構造

の分析、なかでも農民層分解や地主制分析のデータの基礎とされたのは検地帳類の台帳面積および石高であったが、これらの数値は領主が把握できなかった開墾によって、現実と大きくかけ離れていったのでないかという疑念があり、それを数量的に明らかにしてみたいということがあった。

2．研究の目的

17 世紀から 19 世紀後半の約 300 年間にどの程度の開墾がおこなわれたのかについて数量的かつ具体的に明らかにするとともに、農民が行った開墾が藩権力や村落社会といかなる関係のもとに行われてきたのか考察する。すなわち実際の面積を把握することによって、年貢負担のあり方や小作料の問題、反当収穫量など農業生産力、地租改正の意義などを再検討することである。

具体的には、(1)瀬戸内海地域の地域的特質を浮かび上がらせるために、愛媛県・山口県・島根県の耕地増加を村落レベルで把握すること、(2)開墾をめぐる山論（訴訟）史料を収集し、村落共同体が選択した処置から、開墾や山林保護などに対する村民の認識を明らかにすること、(3)藩権力の新開造成と農民的開墾に対する規制・奨励などの対応を明らかにすること、(4)開墾地の耕地状況や田畑の生産力を具体的に明らかにすることなどを目的とする。

なお本研究で用いている農民的開墾とは、藩が資本を投じて行った沖積平野や干潟の大規模新涯開発や 18 世紀以降さかんになる民間資本導入による新開・新田開発以外の開墾のことで、検地帳や名寄帳に登録されていない、山麓から中腹部、あるいは山頂まで切り開かれた開墾地を想定している。

3．研究の方法

耕地開発の後、藩が竿入れした新開地の面積は当然ながら判明するが、それがなされていない農民的開墾は面積すら判明しない。そのため研究方法の前提として、旧藩時代の名寄・検地帳に記載された面積と、地租改正時に測量された面積を比較し、各郡村の高入れ新開地を考慮しながら開墾面積の増加を推定する。その上で山林・原野面積や山論など関連する史料の分析を通じて、農民的開墾がもつ歴史的意味合いを考察する。

4．研究成果

(1)芸予諸島および周防大島においては近世期に開墾が進み、村によっては山林面積より田畑面積が広い村が多数みられることが明らかになった。地租改正時において芸予諸島の東部、すなわち御調・豊田郡に属する島々の村 31 か村のうち 12 か村が耕宅地面積の方が広かった。これを表示すると以下のようになる。

表 1　広島県御調・豊田郡島嶼部の耕宅地面積と山林面積　　単位；町

近世村名	地租改正時の面積			山林面積
	田	畑屋敷	計	
向島西村	54.2	577.1	631.3	83.7
立花村	0.0	103.5	103.5	17.6
岩子島	3.6	137.9	141.5	6.8
向島東村	23.7	390.7	414.4	208.6
重井村	27.8	498.6	526.4	87.6
中庄村	61.7	294.3	356.0	153.9
田熊村	24.1	173.0	197.1	56.2
土庄村	13.0	106.5	119.5	37.5
三庄村	20.1	169.0	189.1	136.8
椋浦	0.0	31.8	31.8	93.9
外浦	1.2	40.7	41.9	72.9
鏡浦	0.0	18.8	18.8	38.8
大浜村	11.1	126.7	137.8	87.9
洲江村	11.3	69.2	80.5	83.1
原村	2.3	68.7	71.0	77.9
瀬戸田町	3.8	66.3	70.1	5.4
北生口村	67.0	136.0	203.0	382.3
名荷村	38.0	145.6	183.6	165.7
南生口村	49.0	161.6	210.6	321.4
西生口村	49.2	136.2	185.4	287.3
高根島	13.3	164.6	177.9	277.5
東野村	38.1	279.8	317.9	577.3
沖浦村	12.3	96.7	108.9	157.1
明石方村	23.7	79.2	102.9	195.6
中野村	108.9	291.8	400.7	469.7
原田村	54.1	101.8	155.9	160.9
大串村	46.3	92.0	138.3	164.8
大長村	30.0	329.7	359.7	714.6
大浜村	10.3	61.9	72.2	212.2
豊島村	27.5	114.9	142.4	298.2
斎島	0.4	23.5	23.9	26.0

上の表には合計値を示していないが、耕宅地面積計 5913 町歩に対して山林は 5470 町歩であった。ちなみに芸備の広島藩領の諸島は耕宅地面積に対する山林の比率は 1.07 倍にとどまっており、ほぼ同面積といえよう。伊予側の諸島は 1.8 倍弱である。中国山地諸村は 10 倍以上であったから、島嶼部との対照性は明らかである。

(2)中国山地地域においても切添えによる開墾が進み、また畑地の水田化など水利設備の整備によって、19 世紀に入ると米の反当収量が 2 石をこえるようになった。このことはこれまで知られておらず、明治 10 年代の『広島県統計書』や地租改正時の等級米などから、中国山地諸村の平均反当収

量は１石前後と考えられてきた。しかし表２に示すように、広島藩でも最も生産力が低いとされた恵蘇郡でも２石前後の収穫があったのである。

表２　恵蘇郡田原村岩竹家の米収穫量

期　間	平均収量	平均反収	備考
天明６～	24.025 石	1.663 石	４年平均
寛政２～	24.840	1.719	
寛政７～	27.550	1.907	２年平均
寛政 12～	?	?	
文化２～	29.910	2.070	２年平均
文化７～	30.507	2.111	
文化 12～	32.929	2.279	
文政３～	30.807	2.132	
文政８～	30.523	2.112	
天保元～	29.014	2.008	
天保６～	26.014	1.800	７年不作
天保 11～	30.456	2.108	
弘化２～	30.210	2.091	４年平均
嘉永３～	27.587	1.909	
安政２～	31.113	2.153	
万延元～	50.182	2.270	不作
慶応元～	46.801	2.117	４年平均

(3)防長両国においても 18 世紀半ばの宝暦検地以降、両国あわせて４万町歩以上の農民的開墾がなされていることを明らかにした。このような具体的な数値を揚げて近代初頭における耕地面積の変化を指摘したことはこれまでの研究ではみられなかった。山口県の地租改正では宝暦検地が正確であるとして土地丈量を実施しなかったが､明治 19 年に至り丈量に着手した。田については 2.1 万町歩余、畑が 1.6 万町歩余、宅地が 0.5 万町歩弱とそれぞれ増加しているのである。ここでは田が増加した理由を郡別に示そう。

表３　田面積の増加理由　　単位；町

郡名	開墾	地目変換	誤謬訂正	計
大島	4.6	107.5	618.9	731
玖珂	67.3	565.1	2,823.3	3,458
都濃	4.7	254.9	1,487.6	1,747
熊毛	2.1	217.0	2,118.8	2,338
佐波	26.7	185.2	1,238.2	1,450
吉敷	25.9	293.15	1,212.5	1,535
厚狭	5.7	227.8	1,137.9	1,371
豊浦	3.7	154.5	3,820.6	3,979
美祢	2.2	251.4	866.2	1,120
大津	3.2	164.8	1,088.5	1,257
阿武	18.8	435.0	1,945.8	2,400
見島	0.0	6.0	48.1	54
計	166.7	2,865.6	18,406.4	21,438

表中の「開墾」とあるのは、原資料では「開発鍬下年期明」とあり、おそらく幕末期に開発された田と推測される。「地目変換」は地租改正時からの変換ではなく、宝暦検地およびその後の高付地と照らし合わせて結果、地目が異なっていたものであろう。そして「誤謬訂正」の大半は、宝暦検地以後に行われた農民的開墾とみてよいと思われる。やはり長州藩でも藩権力が把握できなかった農民的開墾地が多数存在したのであった。

以上のように、17 世紀末の検地等による耕地面積の確定の後も、農民たちによる開墾が何世代にもわたって続けられてきたことを間接的ながらも明らかにした。そしてその面積は藩営新田や町人請負など高付された新開地に匹敵するかというレベルではなく、はるかにそれらを上回る開墾面積であった。

しかし沿岸島嶼部や山間部、あるいは平地部といった地形的な条件に加えて、刈敷や飼料の提供地であった山林・草山を故人の意思で勝手に田畑に開墾できない地域もあったであろうし、山林として利用する方がはるかに村民に富をもたらす地域もあったと思われる。逆に瀬戸内海島嶼部のように、重畳まで段々畑に変えていった地域も存在した。これらは金肥入手の容易さ、栽培作物、水利の問題などに規定されていたといえよう。今後の課題として、山林を開墾していくという行為と、山林資源の活用がどのような関係にあったのかについて、当時の環境問題も視野に入れながら考察していく必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

１．中山富広，在来産業たたら製鉄の衰退とその歴史的意義－出雲・田部家「鉄業創始以来営業状態概略」を手がかりとして－，勝部眞人編『近代東アジア社会における外来と在来』清文堂，査読無，2011，pp5－24，巻無し
２．中山富広，近世中後期における中国地方の開墾について－地租改正前後の統計資料を素材として－，内海文化研究紀要，第 38 号，査読無，2010，pp13－37
３．中山富広，慶応３年備後国恵蘇郡百姓一揆の諸要求，広島大学大学院文学研究科論集，第 69 号，査読無，2009，pp29－45
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00029147
４．中山富広，天保期における安芸国野路山開発，内海文化研究紀要，第 37 号，査読無，2009，pp17－35
５．中山富広，地租改正における地価決定と

収穫高－広島県恵蘇郡奥門田村を事例として－，地方史研究，336 号，査読有，2008，pp1－14
６．中山富広，近世後期中国山地地域の農民経済，広島大学大学院文学研究科論集，第 68 号，査読無，2008，pp15－35
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00025599
７．中山富広，近世安芸国の山稼ぎ業と城下町，内海文化研究紀要，第 36 号，査読無、2008，pp19－32
８．中山富広，明治前期における中国山地の地主小作関係，相良英輔先生退職記念論集刊行会編『たたら製鉄・石見銀山と地域社会』清文堂，査読無，2008，pp275－300，巻無し

〔学会発表〕（計１件）
１．中山富広，中国四国地域における近世後期の農民的開墾の諸相，社会経済史学会中国四国部会大会，2009.11.14，海峡メッセ下関

〔その他〕
ホームページ等
http://home.hiroshima-u.ac.jp/nihonshi/

６．研究組織
(1)研究代表者
中山　富廣　（NAKAYAMA　TOMIHIRO）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：５０１９８２８０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：